

前回は、フランス語にはほんとうに冠詞が必要なのか、という問題を考え、冠詞の機能は何かという問いを出したところで終わってしまった。今回はその続きを考えてみよう。

冠詞のない café は「絵に描いた餅」

名詞の頭につくのは冠詞ばかりではない。une / la voiture と並んで、**ma** voiture (所有形容詞)、**cette** voiture (指示形容詞)、**trois** voitures (数詞)、**beaucoup de** voitures (数量表現)もまた、名詞の頭につく。これらの単語は言語学ではまとめて限定詞と呼ぶのだが、そんな呼び名はいつでもよろしい。その働きは例を見ればわかるように、「どれであるか」(指示形容詞)を示したり、「どのくらいであるか」(数詞や数量表現)を表わしたりすることにある。フランス語の名詞、例えば café 「コーヒー」は頭に何もつかないとき、ばくぜんと「コーヒーというもの」という「概念」しか表わさない。「概念」は「絵に描いた餅」であり、飲んだり運んだりできない。だから、喫茶店でコーヒーを注文するときは、**Un** café, s'il vous plaît. とか、**Trois** cafés, s'il vous plaît. のように、頭に冠詞や数詞をつけることによって、概念としてのコーヒーを飲んだり運んだりできる具体的なコーヒーに変える必要がある。

日本語では、「食後の飲み物は何にしますか」とたずねられたら、「コーヒーお願いします」でよい。「コーヒー」には頭に何もつける必要がない。日本語では「概念」を「具体的なモノ」に変えるのに、何もつけなくてもよいのだ。これは実に便利である。日本語は言わず語らずのうちに、この面倒くさい働きを実現している。ところがフランス語ではそうはいかない。名詞には必ず何か頭につけなくてはならない。このように名詞の頭につけて、「概念」を「具体的なモノ」に変える道具としての重要なものが冠詞なのである。

「概念」という言い方がわかりにくければ、「設計図」と「実際に立てた家」の関係と考えてもよい。冠詞のない裸の名詞 maison は、「設計図」のようなものである。設計図にはこれから立てる家のすべての要素が描かれてはいるが、設計図に人が住むことはできない。設計図をもとにして建てた家が、冠詞のついた une maison である。これなら人が住むことができる。このたとえ話は、ひとつの設計図からいくつも家を建てることができるという点もうまく表せていて、われながら上出来なたとえ話である。

だから、「冠詞の働き」としてまず第一にあげるべきは、名詞の表わす意味を具体的なモノに変える働きである。しかし、上にも見たように、この働きはひとり冠詞だけが持っているわけではない。所有形容詞や指示形容詞や数量表現なども、同じ働きを持っている。そんななかで、冠詞だけが果たしている役割は何だろうかと問うてみると、次のふたつではないかと考えられる。

冠詞の「談話機能」

よく知られているように、冠詞には定冠詞と不定冠詞とがある。あとで詳しく話すが、部分冠詞というのは虚構である。冠詞には「定」と「不定」しかなく、それしかありえない。

では「定」と「不定」のちがいは何か。ふつう、初めて登場するモノには不定冠

詞をつけ、二度目からは定冠詞をつけると言われることが多い。これは必ずしも正しくないのだが、「まちがいだ!」と力んでゴミ箱に捨てるほどでもないので、話の都合上、この定説に乗っておこう。

- (1) Je me promenais quand j'ai vu **un chien** qui s'approchait de chaque personne qui passait.
「散歩していると、道行く人に誰彼となく寄っていく犬をみかけた」

例(1)では un chien は初めて登場するので、不定冠詞がつけられている。ここでいきなり le chien は少しおかしい。いったん登場したら、次からは定冠詞をつけて le chien としたり、代名詞 il を使うことができる。

- (2) **Le chien** avait l'air triste. 「その犬は悲しそうな様子をしていた」

このように、不定冠詞には「初めて登場する人・モノを表わす」という働きがある。逆に定冠詞には、「もう登場済みの人・モノを表わす」という働きがある。

私たちは話をするとき、いろいろな話題を持ち出す。持ち出した話題について、ひとしきり続けて話したりする。これを「話題の出し入れ」「話題の継続」と呼んでおこう。上の例で見たように、冠詞はこの「話題の出し入れ」や「話題の継続」を表わす印としての働きがある。これを冠詞の「談話機能」と呼んでおくことにする。談話機能という切り口で見れば、不定冠詞には「初めて話題にする」ということを表わす働きが、定冠詞には「すでに話題になったものを継続して取り上げる」ということを表わす働きがある。以下はひそひそ話だが、すでにお気づきの方もるように、これは「談話機能」とは何かをわかっていたために、うんと単純化したストーリーである。上に示した原則に合わない例はゴマンとある。そして原則に合わない例こそ、冠詞のほんとうの働きを示していると私は密かに考えているので、のちほど詳しくお話する。

冠詞の「認知機能」

冠詞には談話機能の他に、もうひとつ働きがある。それは次の対立を示す働きで、たいていの人は初級文法の初めの頃にお目にかかっているはずだ。

- (3) J'ai acheté {une pomme / de la viande}. 「私は {リンゴ / 肉} を買った」

不定冠詞はその名詞が「数えられるもの」を表わし、部分冠詞は「数えられないもの」であることを表わす。初級文法の教える通りである。これを冠詞の「認知機能」と呼びたい。

ここでなぜ「認知機能」などという大仰な呼び方をするのか、いぶかしく思う向きもあるかもしれない。名詞には男性・女性の区別があり、不定冠詞の場合、男性名詞には un が、女性名詞には une がつく。un / une の区別は名詞の性を反映しているにすぎず、それ自体はたいした働きをしているわけではない。もし名詞の「数えられる」「数えられない」という区別が、名詞の性と同じレベルの区別であり、冠詞の une / de la がその区別を単に反映しているにすぎないのならば、確かに「認知機能」などという大仰な呼び名は相応しくないことになる。

ここで前回に少し触れた問題を思い出していただきたい。性の区別は名詞の「内在的文法範疇」である。平たく言えば、男性名詞か女性名詞かという区別は、名詞

ごとに決まっています。では、「数えられる」「数えられない」という区別もこれと同じように名詞の「内在的文法範疇」と考えてよいのかという問題を、宿題として前回出しておいた。考えてみていただろうか。もし性が名詞ごとに決まっています、勝手に変えられないのと同じように、「数えられる」「数えられない」という区別も名詞ごとに決まっていますと変えることができないのならば、これもまた名詞の「内在的文法範疇」ということになるはずである。

しかし、ことはそれほど単純ではない。こういうとき、言語学者はアクロバットのような鬼面人を驚かす例を出すことを好む。次の例は英語の例だが、英語では「数えられる」名詞には不定冠詞 a (an)をつけ、「数えられない」名詞は無冠詞で使う。book「本」は誰も知るように「数えられる」名詞である。しかし、ある言語学者はこの book ですら「数えられない」名詞として使われることがあることを示すために、次のような例を考え出した。

(4) Johnny is very choosy about his food. He will not touch shelf.

「ジョニーは食べ物にはうるさくて、本は食べるが本棚は触れようもしない」

ジョニー君は人間ではなく白アリという設定である。人間にとって本は読むものであり、一冊二冊と数えられるものだ。ところが白アリにとっては、本は読むものではなく食べるものである。だから、「白アリの視点」から見れば book は食べ物であり、bread「パン」や meat「肉」などの名詞と同じく「数えられない」ものとして見えるというわけだ。だから I will eat book と同じように、He will eat book となる。フランス語でも同じことが起きる。わかりやすい例で見てみよう。

(5) Nous avons quatre vaches et trois vaches. 「うちには牡牛が4頭と牝牛が3頭いる」

(6) J'ai mangé de la viande de Kobe hier. 「私は昨日神戸ビーフを食べた」

ご存じのように、不定冠詞をつけて un bœuf とすると「一頭の牛」、部分冠詞をつけて du bœuf とすると「牛肉、ビーフ」の意味になる。だから、同じひとつの名詞でも、不定冠詞がつくことも部分冠詞がつくこともあり、「数えられる」「数えられない」という区別は、名詞ごとに決まっていますもう動かせないというわけではない。だから、「数えられる」「数えられない」という区別は、名詞の「内在的文法範疇」ではないと考えるべきである。だから、冠詞の「認知機能」という呼び名は、おおげさな呼び名ではない。「認知」というコトバを使うのは、冠詞が「意味の切り分け」を示すからである。

では次の回に備えて、ひとつ宿題を出しておこう。「意味の切り分け」を示す冠詞の認知機能は、「不定」を示す不定冠詞・部分冠詞にしか認められない。J'ai acheté {une pomme / de la viande}. J'ai mis {la pomme / la viande} (リンゴ 肉) を買った。私はその {リンゴ 肉} を冷蔵庫に入れた。を見ればわかるように、「定」の領域では数えられるリンゴも数えられない肉も、la pomme / la viande と同じ定冠詞になってしまう。なぜ「定」の領域で、冠詞は認知機能を持たないのだろうかというのが宿題である。(とうごう・ゆうじ)